

日本語学科における「日本語教育学概論」の効果 —受講生の学びの分析から—

田崎 敦子 (大東文化大学外国語学部)

The Effect of “Introduction to Japanese Language Teaching” in Department of Japanese Language

Atsuko TASAKI

1. はじめに

日本の大学では、国際や外国語関係の学部日本人学生と留学生を対象とした日本語について学ぶ学科が設置されている場合がある。その多くは、両者がそれぞれの視点から日本語を分析することにより日本語に関する知識・技術を身につけ、多言語多文化社会において日本語の担い手として活躍することを目的としている。大東文化大学では、こうした目的の日本語学科が外国語学部にある。

外国語学部には「日本語教師養成課程」が設置されているが、履修するのは希望者のみで、日本語を専門とする日本語学科の学生も全員が履修するわけではない。しかし、日本語学科のカリキュラムには「日本語教育学系列」¹あり、学生は養成課程とは別に、この系列にある日本語教育関連の科目を最低12単位修得しなければならない。その中で、「日本語教育学概論」(2年生対象、通年)は唯一の必修科目となっている。つまり、彼らは日本語教師になることを希望していなくても「日本語教育学概論」を必ず履修することになる。では、この科目を日本語学科の必修科目とすることにはどのような意味があるのだろうか。本稿では、受講生の学びの分析をもとにこの授業の成果と課題を検討し、この点について論じる。

2. 先行研究

近年、大学において日本語教育関連の科目の教育効果が注目されつつある。西村(2020)は、日本語教師養成課程の教育に、教師養成という面だけでなく、日本語を客観的に捉える視点や実習を

通してチームワークや問題解決能力を養い、異なる背景の他者への理解を深める、外国人の受入れ制度への関心を高める、という効果が認められたと述べている。鈴木(2011)は、大学・大学院で日本語教育を専攻しながらも日本語教師にならない者を「在野の日本語教師」と捉え、彼らが多言語多文化化する地域住民の結節点となる資質を身につけていることに着目している。そして、こうした「在野の日本語教師」を育成することを日本語教育がすべき社会貢献のひとつとして位置づけている。

日本語教師養成課程以外での教育については、志賀(2022)の報告がある。志賀(2022)は、大学の教養科目として開講された「日本語教育学」の教育効果として、日本語を世界の中の一言語として客観的に捉える視点の獲得、日本語非母語話者に対する言語調整、在留外国人・日本語学習者が直面する問題に対する理解などを挙げ、たとえ日本語教師養成を目的とせずとも、多文化共生社会の担い手の育成に効果がある日本語教育関係の講義は、教養科目として開講する意義があると述べている。

多言語多文化が進む日本社会において日本語母語話者が非母語話者の日本語能力や文化的背景を理解し、コミュニケーションを調整できる能力を身につけることは、共生を実現させるためには急務である。そして、近年はそうした人材を育成することも日本語教育の役割として重視されている(庵, 2019; 牛窪, 2015)。上記の科目は、この役割を担うものである。

これらの科目は、日本語教師養成科目、教養科目とその位置づけは異なるが、どちらも学生が自らの関心のもとに選択し受講している点が共通する。一方、本稿で対象とする「日本語教育学概論」は、日本語学科の必修科目であり、学生は日本語教育への関心の有無に関わらず履修しなければならない。授業の位置づけや受講者の動機は上述した科目とは異なる。では、日本語学科の必修科目として開講する「日本語教育学概論」にはどのような教育効果があるのだろうか。本稿では、授業終了後に受講者が記した学びに関する自由記述をもとに、この点について考察する。

3. 授業の概要

本稿で対象とする「日本語教育学概論」では、多言語多文化社会で求められる日本語教師に必要な基礎的な知識を身につけることを目的とし、世界の言語事情・言語政策、日本語教育史、多言語多文化社会における日本語の役割や能力、その教授法など、日本語教育に関連することを広く扱う。

2022年度に行われた授業の項目²(前期・後期)を表1に示す。授業は項目に関する知識を提供する講義に、その知識に関連する自分たちの経験(日本語の会話の進め方や異文化交流など)に関する話し合いを取り入れながら進めた。また、宿題として、その回で学んだことに関する身近な事例を探す課題や(例:住んでいる地域で外国人支援のために行政が行っていること、外国人が多いと思われる職場の例、など)、学んだ知識を確認するための小テストを出した。受講者が示した事例については、クラスで共有し、考察を深めた。成績評価は、授業への参加度及び学期末テストの成績をもとに行なった。

表1 講義内容³

世界の言語事情と言語政策	異文化理解と心理・異文化間教育
日本語教育とは	異文化間コミュニケーション
日本語教育史	言語習得・発達
日本語学習者の多様化	学習者の目から見た日本語
国内外の日本語教育事情	日本語教授法
日本語能力の測定と試験	コースデザイン
コミュニケーションの要素とプロセス	日本語教育におけるコミュニケーション教育
コミュニケーション能力	これからの日本語教育
言語使用と社会	日本語教師として活躍する卒業生の体験談

4. 学びに関する自由記述の分析結果

最後の授業では、1年間で学んだ項目の振り返りを行った。その後、受講者は「授業で学んだこと、印象に残っていること」「この授業の改善点」について自由記述の形式で記し、提出した。回答数は履修者65名中（日本人学生38名、留学生27名）、57名（日本人学生33名、留学生24名）であった。本稿では、この自由記述の中の「授業で学んだこと、印象に残っていること」を主な分析対象とした。

自由記述の分析は、質的データ分析法（佐藤、2008）を参考に行った。分析では、まず自由記述を意味のまとまりに分け、それぞれに内容を示すコードを付した。ひとつのまとまりに複数のコードが付される場合もあった。次に、コードを相互に関連づけながら分類し、より抽象度の高い概念的カテゴリーを生成し、それを説明する図式を作成した。これらの作業を繰り返すことにより分析の精緻化を図った。

分析の結果、22のコードが抽出され、そこから4つの概念的カテゴリーが生成された（表2）。以下にこれらについて述べる。

表2 自由記述から生成されたコード・概念的カテゴリー

概念的カテゴリー	コード
【日本語教師という仕事の理解】	<日本語教育の目的の理解><多様な教授法の理解><多様な学習ストラテジーの理解><異文化理解の促進> <日本語・日本文化の分析力の必要性><日本語・日本文化の伝達><日本語教師の役割の理解><国語教育への応用><自己研鑽>
【日本人学生と留学生の交流促進】	<留学生に対する敬意><日本人学生の理解に対する留学生の喜び> <留学生の日本語学習への関心><日本人学生と留学生のコミュニケーション促進>
【専門分野の自覚】	<日本語に関する学習意欲><関心分野の特定>
【多言語多文化社会への理解促進】	<在留外国人への理解・関心><非母語話者とのコミュニケーションへの理解・関心><非母語話者の日本語への理解><日本語・日本文化の伝達> <外国人に関する政策への理解・関心><身近な外国人への理解・関心> <外国語学習の促進><日本語教育と世界情勢の関係への理解・関心> <異文化理解の促進>

4.1 「日本語教師という仕事の理解」

自由記述には、授業を通して日本語教師の仕事を具体的に理解したことを示すものがあり、そこに付されたコードから【日本語教師という仕事の理解】という概念的カテゴリーが生成された。まず、日本語学習者の目的がそれぞれの背景によって異なること（日本語教育の目的の理解）、日本語教師がそれを把握し、学習者の目的に合った教育をするために多様な教授法や学習ストラテジーに関する知識が必要であることを学んだ記述が見られた（多様な教授法の理解、多様な学習ストラテジーの理解）。

また、受講者は、学習者が活動する場面により必要な会話能力も異なること、それぞれの場面の会話を分析し特徴を理解すること、その場面に関連する日本文化を伝える能力や変化する言語・文化的側面を学び続けることが必要であることも意識するようになっていく（日本語・日本文化の分析力の必要性、日本語・日本文化の伝達、自己研鑽）。以下に、これらに関する受講者の記述の一部を挙げる（表3）。

表3 自由記述における意味のまとまりとコード化の例 (1)

記述	コード名
学習者によって必要な日本語は違うということが印象的だった。確かに留学生と労働者がよく使う日本語は違う。学習者が日本人とうまく話せるようになるためには、こういう日本語を分析するのも教師の仕事というのが印象に残った。	日本語教育の目的の理解、日本語・日本文化の分析力の必要性
私は日本で日本語を教えたいと思っています。日本にいる外国人は、日本人と話せて、自分で生活の中の色々なことができるようになることが一番大切だと思うので、この授業を受けてから、学習者がそういうことができるようになるようにしたいと思いました。	日本語教育の目的の理解
私はこの授業で様々な教授法を学び興味を持った。言語の授業は知識を詰め込むのみでなく、それを実際に運用することができるようになることが大半の到達目標だと思う。それを叶えるにあたって様々な教え方を知ることが必要だ。	日本語教育の目的の理解、多様な教授法の理解
外国人が日本で生活するためには、やはり会話が一番重要だと思う。これまで日本語の会話の特徴について考えたことがなかったが、この授業を受けて日本語を教えるためには教師が会話の特徴を知っていないといけないことがわかった。	日本語教育の目的の理解、日本語・日本文化の分析力の必要性
外国人が日本で生活するためには日本の習慣を教えたり、留学生には流行っているものを教えないといけないとか、そういうものは時代によって変わったりもするので、日本語教師はずっと学び続けたいといけないと思った。	日本語・日本文化の分析力の必要性、日本語・日本文化の伝達、自己研鑽

授業を通して日本語教師の役割について考えた者もいた。日本語教師は、日本語や日本文化を教えるだけでなく、外国人である学習者の文化的背景や異文化接触の問題などにも配慮する、日本語母語話者を教育する、という役割があることにも言及されていた。そこには、ゲストスピーカーとして授業に招いた、海外で日本語教師として活躍する卒業生の存在も大きかったようだ。教師による授業とは異なり、同じ学科の先輩の体験談は受講者にとって身近で現実味があり、日本語教師の役割が理解しやすかったことが窺われる (表4)。

表4 自由記述における意味のまとまりとコード化の例(2)

記述	コード名
授業でやった異文化間教育というのははじめて聞いた。でも、日本で生活する外国人は異文化を理解しなければいけないし、もしクラスで生徒が元気がないとき、それは異文化に合わないからかもしれない。なので、日本語教師は異文化間教育も必要だとわかった。日本語教師の仕事の幅は広いなあと感じた。	日本語教師の役割の理解
海外で日本語教師として働いていた先輩の話がとてもよかった。海外で日本語を教えることは、日本語だけでなく日本人として日本文化を伝えることだと知って、私も海外で日本語教師の仕事をしてみたいと強く思った。	日本語教師の役割の理解、日本語・日本文化の伝達
日本語教師は日本人が外国人とうまく話せるようになるための教育もするということがとても納得できた。自分もその方法がわかればもっと外国人と友達になれると思うので、日本人と外国人をつなぐ日本語教師の仕事に興味を持った。	日本語教師の役割の理解

さらに、国語教師を目指している受講者の中には、日本語教師の仕事を理解したことにより、それを国語教育に応用しようとする者もいた(表5)。

表5 自由記述における意味のまとまりとコード化の例(3)

記述	コード名
私は国語の教師を目指しているので、楽しく授業を行える教授法など、いろいろな教え方の工夫については利用できると思いました。	国語教育への応用
自分は国語教師を希望しているが、外国人労働者が増えていて、その子供がクラスにいるかもしれないので、国語教師にも日本語教育の知識が必要だということがわかった。	国語教育への応用
ピアラーニングでは学習者と学習者がコミュニケーションをとって日本語能力を高めることを目指すので、教師はそれをサポートするというのがこれまでの教師とは違うイメージで印象に残った。私は国語教師を目指しているのですが、国語教師にも必要だと思う。	日本語教師の役割の理解、国語教育への応用

このように、受講者は授業を通して様々な観点から日本語教師の仕事を具体的に理解し、現実的な仕事として捉えるようになっていく。この結果は、授業の目的のひとつの達成ということだけでなく、日本語教師という仕事の内容もわからずに日本語教師養成課程を履修するかどうかを決定するという状況が回避されたことを意味するものでもある⁴。

4.2 「専門分野の自覚」

自由記述には、日本語を教えることについて学んだ受講生が日本語や日本文化の知識の必要性や重要性を認識し、日本語を専門とすることへの意識を高め、今後の学びへの意欲を示す以下のようなコードが生成された（表6）。

表6 自由記述における意味のまとまりとコード化の例（4）

記述	コード名
日本語教育の動詞の活用や形容詞の説明が日本人が習うのと違ったので驚いた。動詞の活用はとてもわかりやすかった。日本語教師になりたいので、日本語教育の文法は重要になるのもっと勉強しようと思う。	日本語に関する学習意欲、関心分野の特定
特に会話に関係する社会言語面の日本語の特徴が印象に残った。社会言語というのも初めて知った。高コンテクストも「確かに、こう言うかも」という例がたくさんあった。会話の分析が面白かったので、談話分析のゼミに興味を持った。	日本語に関する学習意欲、関心分野の特定
日本語教師になるつもりはないが、日本語学科なので、将来日本語について外国人に説明できるようになりたい。	日本語に関する学習意欲

日本語教師を目指す受講者は、日本語の関心分野を特定し、日本語教師になるためにそれを学んでいきたいという意欲を示している。一方、日本語教師になるつもりがない者も、日本語を専門とする者として外国人に日本語を教えられようになりたいと考え始めている。こうした専門分野の学習への意欲や動機付けに関するコードから【専門分野の自覚】という概念的カテゴリーが生成された。

4.3 「日本人学生と留学生の交流促進」

日本語学科は、在籍学生の約2割が留学生で、日本人学生と留学生が共修や交流を通して多様な視点を学び国際感覚を身につけることが特長になっている。しかし、それを実現させるのは容易ではない。その中で、自由記述には両者の距離が縮まり、コミュニケーションが促進される様子を示す記述が見られた。そして、そこに付されたコードから【日本人学生と留学生の交流促進】という概念的カテゴリーが生成された。

日本人学生は授業を通して外国語として日本語を学ぶことの難しさを知り、母語ではない日本語で大学の授業を受けている留学生に対して敬意を抱くようになっていく。また、授業内容との関連から、留学生がどのように日本語を勉強してきたのか、どういうことを難しく感じているのかという疑問も生まれ、それが留学生とのコミュニケーションのきっかけとなっていた（表7）。

表7 自由記述における意味のまとまりとコード化の例(5)

記述	コード名
外国人との日本語の話し方を留学生と一緒に考えたのがとても印象的でした。留学生は日本人と話すためにいろいろと努力をされていて、その経験はとてもためになり、もっといろいろ聞きたいと思いました。	留学生に対する敬意、留学生の日本語学習への関心、日本人学生と留学生のコミュニケーション促進
授業で教授法を勉強して留学生がどのように日本語を学んだのか興味を持ち、授業の後勉強方法について留学生と話しました。授業で学んだこととリンクしてとても勉強になりました。	留学生の日本語学習への関心、日本人学生と留学生のコミュニケーション促進
授業で日本語の会話の難しさの話のとき、留学生の経験がとてもおもしろかった。授業内で留学生と話す時間をもっと作ってほしかった。	留学生の日本語学習への関心

一方、留学生もこの授業で日本人学生と共に学んだことを印象深いこととして挙げている(表8)。

表8 自由記述における意味のまとまりとコード化の例(6)

記述	コード名
日本語の社会言語面の特徴の課題のところが一番印象に残っている。最初はこの課題どうすればいいかわからなかったけど、日本人の友達と話したら教えてもらってとてもよくわかった。日本人の友だちも私の話が役に立ったと言いました。	日本人学生と留学生のコミュニケーション促進
授業の後、日本人の友達が私に日本語の教科書について聞きました。日本語の勉強の方法について話して、日本人学生が日本語教育について興味があっただけだった。	日本人学生の理解に対する留学生の喜び、日本人学生とのコミュニケーション促進

この授業で日本語教育について学ぶことにより、留学生の学習経験が日本人学生と留学生の話題となり、両者のコミュニケーションが生まれた様子が上の記述から窺われる。これは、授業の本来の目的ではないかもしれないが、授業を通してこうしたコミュニケーションが促進されたとすれば、両者の共修・交流を推進する学科の趣旨に沿う成果である。

4.4 「多言語多文化社会への理解促進」

自由記述に付されたコードには、受講者が多言語多文化社会への理解・関心を深めたことを示すものがあり、これらのコードから【多言語多文化社会への理解促進】という概念的カテゴリーが生成された。

日本語を外国語として学ぶ際の難しい点、非母語話者が間違いやすい点を理解した受講者の記述には、非母語話者の日本語の誤りに寛容になり、非母語話者とのコミュニケーションへの関心が高まったことを示すものが見られた。そして、留学生に限らず非母語話者との活動に関わりたい、もっと非母語話者と話してみたいという気持ちが強くなったという者もいた（表9）。

表9 自由記述における意味のまとめりとコード化の例（7）

記述	コード名
この授業を通して、日本語非母語話者に対する考え方が大きく変わりました。正直今までは、日本人以外の人と関わることに一切興味が無かったのですが、この授業を受講した事で、日本語非母語話者の苦勞がわかり、外国の方とも「今後の人生で触れる機会があったらいいな、話してみたいな」と思うほど、外国人の方に対する興味が出てきました。	非母語話者とのコミュニケーションへの理解・関心
外国人が日本語を話すことはとても難しいことがわかりました。自分が外国人だったら、絶対日本語を話すのは無理です。これからは、外国人がちょっとおかしな日本語を話しても仕方ないと思うし、それでも話したいと思う。	非母語話者とのコミュニケーションへの理解・関心

さらに、授業で在留外国人に対する政策や在留資格についても触れたことで、受講者は身近な外国人への関心、在留外国人を取り巻く環境にも関心を持ったようである（表10）。

表10 自由記述における意味のまとめりとコード化の例（8）

記述	コード名
私の従妹はオーストリア人と日本人のハーフで、小学校までオーストラリアで育って今日本の中学に通っています。日本語はペラペラですが、勉強についていけないと言っています。この授業を受けて勉強と日常会話の日本語は違うとわかりました。きっとその問題だと思います。	身近な外国人への理解・関心
授業で在留外国人のことを学んで、おじいちゃんがいる施設で働いている外国人を思い出した。とても一生懸命働いているが、介護士試験に合格しないと帰国しなければいけないとしたらつらい。外国人の政策は私たちの生活にも影響すると感じた。	身近な外国人への理解・関心、外国人に関する政策への理解・関心

受講者は、学習者に様々な文化や習慣、考え方があることを知り、異文化に対しても理解や関心が深まっていた。また、授業で学んだことを自分の外国語学習に応用しようとする者もいた(表11)。

表11 自由記述における意味のまとまりとコード化の例(9)

記述	コード名
日本の小学校の給食や掃除や上履きを理解できない外国人がいることに驚きました。小さなことにも文化の違いがあることが印象に残りました。私は今中国語をとっているのですが、中国の文化ももっと知りたいと思います。	異文化理解の促進
この授業でいろいろな教授法や学習ストラテジーを学んだことが印象に残っている。私は今フランス語を取っているが、自分の勉強法は学習ストラテジーがいろいろ混ざっていた。その特徴もわかったので、うまく使えればいいと思う。	外国語学習の促進 多様な教授法の理解、 多様な学習ストラテジーの理解

中川・天満・上野山(2014)は、日本語母語話者が非母語話者と相互理解を深めるためには、日本語だけでなく、複数の言語のコミュニケーション・スタイルを理解することが重要だと述べている。この考えに基づけば、日本人学生が積極的に外国語学習に取り組み、外国語能力を身につけたり、異文化理解を深めたりすることも多言語多文化社会への理解・参画につながるといえる。

さらに、日本語教育を通して日本と他の国との関係を理解したことや在留外国人に関心を持ったことを示す「日本語教育と世界情勢の関係理解」、「在留外国人への関心」というコードも抽出された(表12)。

表12 自由記述における意味のまとまりとコード化の例(10)

記述	コード名
日本語教育についての歴史的な側面を学べたことが印象に残った。外国での日本語教育や外国人の受け入れは社会情勢と関係していることがわかったからだ。特に留学生の数の目標があってそのための政策があったことは驚いた。	日本語教育と世界情勢の関係理解
海外で日本語を学ぶ人が多いことを初めて知った。特にアジアの国の学習者が多いが、日本で働きやすいからかもしれない。日本で働いている外国人はどこでどうやって日本語を学んだのか少し興味を持つようになった。	日本語教育と世界情勢の関係理解、 在留外国人への関心
日本がウクライナ人を受け入れているのは知っていたが、そこに日本語教育が関わっていて、支援になっていることが印象に残った。	日本語教育と世界情勢の関係理解

上記の表9～12に示したコードは、異なる言語・文化背景の人々との共生が求められる多言語多文化社会を理解するために必要な要素である。また、注目したいのは、日本語教師を目指していない者も非母語話者とのコミュニケーションへの関心を高め、機会があれば非母語話者との活動に参加したい、日本語母語話者とのコミュニケーションを助けたいという意識が芽生えた点である。こうした母語話者の姿勢は、非母語話者の社会参加を促すための助けとなる。そして、これは鈴木(2010)のいう「在野の日本語教師」の養成にもつながり、日本語教師以外にも日本語教育を理解する人材を育成していくという現在の日本語教育の課題(庵, 2019; 牛窪, 2015)に応えるものである。

4.5 受講者の学びの概念図

ここでは、上記の4つの概念的カテゴリー、【日本語教師という仕事の理解】、【日本人学生と留学生の交流促進】、【専門分野の自覚】、【多言語多文化社会への理解促進】の関連について、概念図(図1)に基づいて述べる。

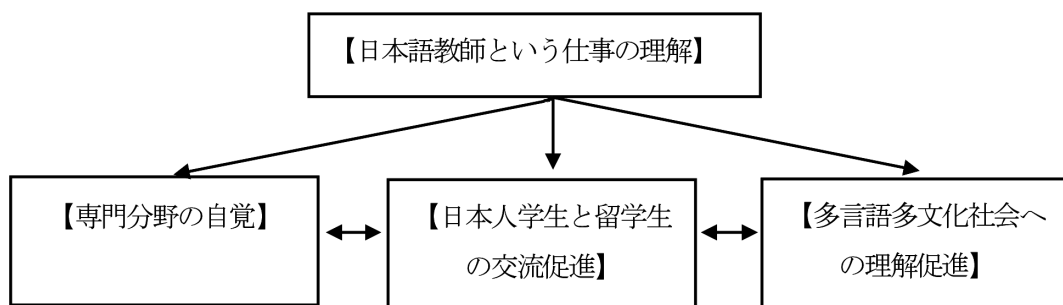


図1 受講者の学びの概念図

まず、受講者が日本語教師の仕事を様々な点から理解したことを示すコードからは、【日本語教師という仕事の理解】という概念的カテゴリーが生成された。非母語話者に日本語を教えるためには、日本語について非母語話者にわかりやすく説明できる知識や会話の分析力などが必要であること、日本語教師は日本語を教えるだけでなく、日本で生活するための、また日本人と関係を構築するための文化的特徴を教える必要があることが理解されている。そして、時代によって変化する言語・文化を教えなければならない日本語教師は、自己研鑽が続く職業として捉えられていた。

【日本語教師という仕事の理解】は、【専門分野の自覚】、【日本人学生と留学生の交流促進】、【多言語多文化社会への理解促進】を引き出し、それぞれが相互に作用していた。日本語教師には日本語や日本文化に関する知識や技術を習得する必要があるという理解は、自分たちの専門である日本語をより深く学ぶことへの動機付けとなった。また、たとえ日本語教師にならないとしても、日本語を専門とする者として、将来非母語話者に日本語を教えられる人、母語話者と非母語話者のコミュニケーションを助けられる人になりたいという意欲も芽生え、そのために日本語・日本文化について学ぼうとしている。これらが【専門分野の自覚】という概念的カテゴリーにまとめられた。

そして、外国語として日本語を学ぶ難しさを学んだ日本人学生は、日本語学習者としての留学生に敬意と関心を持ち、学習方法について尋ねることもあった。留学生も日本人学生の関心を好意的に受け止め、日本語教育を話題として両者のコミュニケーションが促進されるという効果をもたらした。こうした両者の態度により【日本人学生と留学生の交流促進】が生成された。これは、日本人学生と留学生の共修・交流を推進する学科の学生の学びを促し、【専門分野の自覚】を高めることにも貢献するものだといえる。

また、日本語教育に関連して在留外国人に関する政策について学んだ結果、受講者の関心は留学生だけでなく日本で働く外国人にも広がり、日本で働く外国人はどのような立場なのか、日本語をどう学んでいるのか、などの疑問を抱くようになったことが抽出されたコードからわかる。日本語教育が世界の情勢と関連していることを知り、ウクライナ人の受入れなど身近な問題について日本語教育の観点から捉え直す記述も見られた。さらに、授業で学んだ外国語教授法や学習ストラテジーを自分の外国語学習に適用し、学習方法を見直す姿勢も窺われた。こうした関心や外国語学習への意欲は【多言語多文化社会への理解促進】となり、【日本人学生と留学生の交流促進】とも相互に作用することが期待できる。

このように、【日本語教師という仕事の理解】は、他の3つの概念的カテゴリーを引き出し、結果的に4つの概念的カテゴリーは相互作用により強化された。これは本授業の成果が深められたことを意味するものである。

5. まとめと今後の課題

上述したように、本授業の学びに関する自由記述の分析から、この授業が日本語教師を養成するためだけのものではないことが示された。

受講者の学びの記述から【日本語教師という仕事の理解】という概念的カテゴリーが生成されたことは、この授業の本来の目的が達成されたことを意味している。それ以外の3つの概念的カテゴリーは、授業開始前は成果として明確に想定したものではなかったが、こうした成果が得られたのは「日本語教育学概論」という日本語教育に関わる事柄を広く取り上げた授業だったからである。

また、これらの成果の意義は、この授業が2年生の開講科目であることにも関わる。専門科目中心となる3年生になる前に【専門分野の自覚】が芽生えたことは、専門の学習・研究を深めるための動機付けとなる。また、この授業を通して日本人学生と留学生の相互交流が促進されたとすれば、専門の学習・研究を協働的に進めるための助けとなるはずである。そして、【多言語多文化社会への理解促進】は、大学での学びの視野を広め、共生のために必要な能力の養成につながる。

本授業に以上のような成果、意義があるとすれば、授業は2年生で開講すること、日本語教育の特定の分野に絞るのではなく「概論」として、日本語教育の内容・方法だけでなく、日本語教育を取り巻く情勢及び日本語教育の必要性や役割を多様な視点から議論することが重要となる。

また、今回の分析により、授業の進め方についても示唆を得ることができた。例えば、日本語教

師のロールモデルとして大きな役割を果たした、先輩の体験談を授業に取り入れることは今後も継続し、さらにその交流を促す方法なども工夫できれば、日本語教師を目指す学生の支援となる。また、学科での学習・研究の充実に必要な【日本人学生と留学生の交流促進】を強化するためには、クラスで両者のディスカッションや協働作業を積極的に行うことが効果的であろう。

本稿では、受講者の学びの分析を通して、日本語学科において「日本語教育学概論」の成果を示し、授業の方向性についても示唆を得た。しかし一方で、受講者からはこの授業の改善点として、「学生間の活動が少ない、日本人学生と留学生の交流が少ない、もっと日本語の教え方を具体的に学びたい、実際に教える体験をしたい」などの意見も寄せられた。また、本授業は学科の必修科目であるため、受講者は必ずしも日本語教師を目指して受講するわけではない。そのため、日本語教育に特に関心を持っていない受講者に対する対応も考えなければならない。今後は、こうした課題及び今回の分析で得られた結果を基に、日本語学科の必修科目としてさらに充実させるための検討を重ねていきたい。

注

1. 「日本語教育学系列」には、本授業以外に「多文化社会」「日本語教育学」「応用言語学」など8科目ある。
2. 本授業の内容は、「外国語学部日本語教師養成課程」において割り当てられた教育内容に対応している。
3. ひとつの項目を数回の授業で扱うこともあるため、項目数と授業回数は一致していない。
4. 日本語教師養成課程の履修申請は、本授業受講後も可能である。

引用文献

- 庵功雄（2019）「マインドとしての〈やさしい日本語〉—理念の実現に必要なもの—」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美（編）『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版，pp.1-21.
- 牛窪隆太（2015）「教師の役割と専門性を考える」神吉宇一（編）『日本語教育学のデザイン—その地と図を描く』（pp.145-169）凡人社.
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.
- 志賀玲子（2022）「多文化共生に向けての『教養としての日本語教育学』の効果」異文化間教育 56号，pp.111-127.
- 鈴木寿子（2011）「『日本語教師にならない人』にとっても有益な日本語教師養成はどうあるべきか—開放的教師養成のための一考察—」『リテラシーズ』8，pp. 33-38.
- 中川良雄・天満理恵・上野山愛弥（2014）「日本語教員の養成は、グローバル人材の育成につながるか」『日本語教育方法研究会誌』21（2），pp.54-55.
- 西村美保（2020）「多文化共生時代における母語話者育成のあり方—教養としての日本語教師養成—」『大学日本語教育養成課程研究協議会論集』18，pp.13-24.